

釈迦堂五百羅漢の彫刻

釈迦堂周囲の八枚の堂羽目には五百羅漢の彫刻が、はめ込まれています。

五百羅漢とは、

仏の滅後に行われた第1回目の經典編纂(結集(けっじゅう))に集まった仏弟子のこと。狩野一信(38歳)が下絵を描き、松本良山(53歳)に彫刻を依頼したが最初は断ったが、しかし良山も最後の仕事と引き受けたようです。

1853年暮れに奥さまと弟子3人を連れ成田の大野屋旅館の離れに居を構え、醸造元鍋店の酒蔵の片隅を仕事場として一枚彫りの五百羅漢を十年の歳月をかけて完成したと言われています。

しかし良山が作業を始めてから五年後の1858年に釈迦堂は完成しています。十年を信じると釈迦堂建立時は四面しか完成していないことになり、それはおかしい話です。

私の研究では、四年余で完成しているようです。完成は1857年暮れか1858年の初め頃と推定。いずれにせよ十年ではない。このことは別項「私の研究」で説明したいと思います。

狩野一信 (1816年~1863年) 若くして亡くなる 47歳没

芝増上寺の五百羅漢百幅を描いたことで有名です。96幅描いて亡くなったが、残り4枚は下絵のみが描かれていたので弟子(養子)が完成させた。

良山に五百羅漢の彫刻を依頼してから10年後に亡くなっています。

松本良山 (1801年~1872年)

千葉県船橋市の出身で子供のない仏具店を営む夫婦の養子となる。しかし良山が十三歳の時この夫婦に男の子が生まれる。良山は立場が変わったのか家出をして京都の彫り師の弟子となり十年の修行を積む。仏師として認められた良山は東京に戻り更に十年の板彫りの修行をして、一人前の彫工として独立する。

羅漢とは

阿羅漢の略称で「尊敬される人」あるいは「施しを受けるに値する人」という意味を持つ、お釈迦さまの高弟や最高位に達した修行者を指す。

表情豊かな五百羅漢の中には、亡き人を思わせる顔立ちの羅漢さまが必ずいるといわれます。

そのことから「五百羅漢をお参りすると亡き人に会える」「供養につながる」という信仰が生まれ、人びとの間に広がっていきました。成田では、亡き人の面影を偲び、追善供養の祈りを込めてお参りする風習が昔はあった様です。

私の研究抜粋 (詳しくは後日別項で述べる予定です)

釈迦堂再建の流れ(推定)赤字の月は推定、赤字以外は成田山の資料による

1. 1853年 8月 釈迦堂再建の許可を得て成田山は狩野一信に五百羅漢の下絵を依頼。
2. 1853年 9, 10月の二カ月で狩野一信が五百羅漢の下絵を描く。
3. 1853年 11月初旬狩野一信が松本良山に彫刻を依頼した。一度は辞退するも引き受ける。
4. 1853年 11月中旬に成田大野屋の離れに引っ越し下旬から彫刻を始める。
5. 1857年の暮れに五百羅漢の彫刻完成か? 遅くとも完成は1858年前半であろう。
6. 1858年 8月 11日 釈迦堂落慶

以上のことから五百羅漢の彫刻期間は、四年か四年数カ月であろう。四年とすれば五百羅漢の彫刻は、単純計算すると一面半年、八面で四年となる。

釈迦堂の彫工は松本良山・嶋村俊表・後藤縫之助・藤原政義の四名であるが、松本良山のみが釈迦堂完成に間に合わないことはありえないであろう。1860年には完成記念に出山釈迦像を成田山に寄進していることから十年ではないことが分かる。この松本良山作の出山釈迦像は、毎年12月8日(御釈迦様が悟りを開かれた日)「釈尊成道会」の時、釈迦堂に展示される。